

中皮腫 前向きに闘病20年

保育士の鹿川さん 浦添

アスベスト(石綿)などによって胸膜や腹膜などに悪性の腫瘍ができる希少がんの一種「中皮腫」を発症し、約20年間手術や抗がん剤治療を繰り返しながら保育士として生活する県出身女性がいる。民間団体「中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会」によると、一般的に余命2年とも言われる中皮腫で長期間療養する患者は極めてまれ。同会は13日にセミナーを開き、女性が闘病体験について語る。

(社会部・下里潤)

女性は浦添市の鹿川真弓(まゆみ)さん(46)。出身地の石垣島で幼い頃に石綿に暴露したと考えられるが、詳細は分からない。26歳の時に腹膜中皮腫を発症。治療法を求めて国立がんセンターを受

診したが、「緩和ケアしかない」と言われ、がくぜんと「余命2年」「治療法はない」など、見たくもない情報ばかり。不安は募る一



中皮腫について「1人で悩まないで」と呼びかける鹿川真弓さん(10日、浦添市内)

13日那覇でセミナー「1人で悩まないで」

方だった。そんな時、主治医の提案で抗がん剤治療を開始。腫瘍が転移しやすい子宮や卵巣を摘出するなど手術も繰り返した。

家族など周囲の支えはもちろんだが、入院中に出会った患者の存在に助けられた。「私より症状が重いのに何でこんなに明るいのだろう」。病気に悩みふさぎ込む毎日より、楽しく前向きに、一日を無駄にしない方が良く、前を向けるようになった。

現在は保育士に復職し、月1回の抗がん剤治療を続ける。副作用で仕事を休まざるを得ない日も多いが、職場の理解を得て柔軟に働いている。「同じような病気で1人で悩む人は多いと思う。誰かと話すことで気持ちも楽になる。私の体験が少しでも参考になれば」と話した。

セミナーは午後1時から那覇市の県立図書館で。専門医の最新情報や支援内容について聞けるほか、参加者の交流会もある。午前9時から相談会もある。

問い合わせは同会、電話0120(117)554。